

< 2012年2月 >

古賀 順子

「フランス大統領選前夜」

2012年2月、ヨーロッパ全体がシベリアからの厳しい寒波に凍えました。フランス各地で記録的な寒さが続き、パリも連日朝晩マイナス6~7℃まで下がり、昼間も0℃を超えませんでした。そしてこの寒波は、暖房による電力消費量の記録も更新しました。フランスの電力会社EDFによれば、2月8日夜の電力消費量は101,700メガワット。2010年12月15日の過去最高を5,000メガワット上回りました。数字が大きいので個人レベルで見ると、フランス人一人当りの年間電気消費量は7,491キロワット(2010年)で、ドイツ(6,429)、イギリス(5,277)、イタリア(4,885)を抜いています。フランスのエネルギー源が電力であることが分かります。私のアパートマンも冬の電気料金は夏の2~2.5倍に跳ね上がります。過去5年間の消費量はほぼ一定で年間10,000キロワット、電気料金が月額約100ユーロです。私が住む建物に都市ガスはきていません(パリでは珍しいことではありません)。一人暮らしで、暖房、お風呂の給湯タンク、調理、照明、電化機器などすべてを電気で賄っているのだから、平均消費量を上回っているのだと思います。その電力供給の内訳(2010年)は、原子力発電81%、再生エネルギー源10.7%(内水力発電7.9%)、石炭3%、石油0.3%、その他という結果です。フランスのエネルギー=電力=原子力発電の政策は明確です。昨年3月11日の福島原発事故を被った日本人として、原子力発電の行方はフランスにいても何より気になる問題です。

原子力発電に関する政策は、この4月に迫ったフランス大統領選挙でも大きなポイントのひとつです。2月15日、大寒波が緩むと同時にサルコジ現大統領が再選出馬の公式表明を行ない、いよいよ右派サルコジ対左派オランダの戦いが始まりました。失業対策、学校教育など具体的な諸政策を提示していますが、2月末の現時点でどちらが選出されるか予想は難しいようです。シラク大統領からサルコジ大統領と右が続き、バランスとしてそろそろ左という声もあります。原子力発電を例に挙げれば、サルコジ氏は原発推進です。アルザス地方のコルマルから南東30KMにあるフェッセンハイム原発には2機の原子炉があります。1978年から稼働し、1機につき900メガワットの発電能力を持っています。オランダ氏はフェッセンハイム廃炉へ向かう方針を示し、サルコジ氏は継続を表明しています。フランスは地震国ではありませんが、ドイツとの国境に近いフェッセンハイムは断層の上であり、地震が起こりうる場所です。また、35年を過ぎて老朽化してきた原子炉の稼働継続の安全性も問われています。

「7年任期で再選回数制限なし」のフランス大統領制は、シラク大統領下2000年9月24日の国民投票で「5年任期で再選1回のみ」に変更されました。1981年から14年続いたミッテラン政権、1995年から2007年までのシラク政権、2007年からはサルコジ大統領。もう一度サルコジ氏になるのか、「今こそ変化」をスローガンに掲げる社会党オランダ氏が選ばれるのか、選挙権のない私たち外国人はフランス国民の選択を見守るしかありません。4月22日(第一回投票)、5月6日(決戦投票)までフランスは大統領選一色になりそうです。